

その他

シベリアに送られて

北海道 市川 洲 二

昭和二十年八月九日午前二時半爆音で目がさめた。とたんにソ連の飛行機であると察し、すぐ家内を起こして子供等に防空服装をさせた。当時は天候悪く防空壕にははいれないで官舎の押入の下の物を全部出して、ふとん一枚を敷いて防空壕がわりにして、家内に「これきり逢えないかも知れないので後は頼む」と一言して指令部に走った。

やがて十二日十時過ぎに将校は全員参謀長室に集合と
のことで集まった処、家族をまだ疎開させていないもの

がいるか、と言われ私が子供がまた四歳、三歳、零歳の三人で疎開しても生きておれないと思うので最後は私が処分しますと言うや「手まどい、足まどいになるから今日二時に出る列車で疎開させろ命令だ……」と言われ、いたし方なく官舎へ走り家内に告げて子供三人の準備と少しばかりの食糧に悪くならないようなものとして米をフライパンでいり、約二升ぐらいと菓子類を持った。

列車は二時と言ったがなかなかこない、四時になって漸く来たが待っていた一般人もわれ先に乗って子供等は乗れない。やむなく軍人家族や軍属の家族を列車の中央に乗せるように護衛の軍人等に話してホームに出た。子供等は列車に乗っただけでうれしかったのだろう、窓から父さんさようならの連発であったが、家内はある程度覚悟をきめていたのか、ハンドバックにカミソリが見え

た。家内に「決して早まったことをするでないよ、どんなことがあっても行きのびて子供等を内地まで連れて行くんだよ」と言った。

間もなく発車となり子供等は見えなくなるまで手を振っていた。無事を祈りながら帰ったが駅前広場はまだ疎開者でいっぱいであった。

昭和二十年八月十五日夕方、新京駐屯の百四十八師団であり、満州中部防衛指令部である部隊に、新京市内の日本人が約四千人ほど日本は戦争に負けたので我々市民を助けて貰いたいとつめかけて来たものであった、部隊としてもどうすることも出来ず兵舎に入れたものの翌朝からの食事のことも考えねばならず、経理部将校としても少しばかりの人員でないことから直ちに部下、下士官を集めて先ず飯を炊く準備にかからせて出来次第おにぎりを作らせて次々に配給を始めたが、四千人からのものを数人の者ではどうにもならず頼って来た人の中から丈夫そうな婦人方に応援を依頼したところ何人か来て手伝ってくれたが飯の出来るのがなかなかで、夜通しの作業で皆疲れ切って朝方には交代するのにあまり来てくれ

なくなり皆なもくたくたになって寝込んでしまう有様であった。

八月十七日にはソ連の中佐が戦車で指令部前に到着し師団長閣下に面接したいとのことであった。

ソ連軍が進駐して来てからは次々に建物の明け渡しを要求され遂に南嶺の建国大学までつめられたが、大学の校舎三校が十重二十重の鉄条網を急造させ高いぼうろうからソ連兵が監視しており逃げようとしてうたれて死んでいる者も見られた。

十一日に入って千五百人から二千人くらいを一団としてシベリヤ方面と思われる方に作業隊で出されて行ったが、自分等もいよいよ十一月十一日に行き先もわからず新京駅の貨物ホームに集められソ連へ連行され、あの極寒の地での抑留が始まる。

抑留中は馬鈴薯、トマトの種蒔き、伐採作業など最後に野菜貯蔵庫に勤務しているときゴミするからすぐ準備して集まるように言われ本当かも知れないと同僚等で話し合い、帰る者に食べさせる野菜を数回貨車まで運搬して終わったのは夕方暗くなってからであった。

そのまま十月二十日出発し、十一月八日ナホトカに着いたが船が来ないので浜辺に八日間も船待して十一月十一日にようよう復員することが出来、生家に着いた。家族達もどうにか引揚げていた。十一月三十日小雪の降る日であった。

その後体調も悪く通院し回復を待って北海道に渡ったもので土建業の帳場として勤めたが不景気のため二十九年に退職して赤平の役所に勤め生活の道をたてて六十歳の停年まで二十年七か月勤めて退職して更に土建会社に再就職、今は余生を送っている。

南洋から引揚げて

福島県 菅原 タケ子

私は、昭和十六年、親と共にパラオ島の清水村に行き、秋には、結婚してコロウルの町に行った。主人の妹一人と長女と五人家族になり、主人は島隊という部隊につとめていた。その頃、戦争は日々激しくなり、食する物が

不足になってきた。あらゆる物が配給になり、内地からの輸送がとだえた。そのとき、コロウルの町は空襲となり、疎開が始まった。私は清水村の親もとに疎開した。食する物はほとんどなく、農業をしていた親の作物も盗難にあい、さつまいもの汁や木の芯が主食で、それさえも食するに足りず、ヘビやカエルまで皆が食べるようになった。栄養失調で死亡する者は日々多く、高い山は餓死した人が埋められ、畑のうねのようで言葉には言いあらわせないほどだった。戦争はなんと悲惨なことだろう。

清水村は、毎日B29の襲撃で防空壕生活が続ぎ、サイパンが玉砕になり、まもなく東京が空襲されて、清水村の人達も驚き、日本が負けたという気持ちだった。海のほうは、アメリカの軍艦が囲み、光が町のようにピカピカと艦砲射撃になると皆が考えていた。ある日、さつまいもの植えつけをしていたら、飛行機はピラを清水村にまき、そのピラをおそるおそる拾ってみたら、マンガの絵で、日本が負けたことがかいてあり、戦争が終わったことを知った。